

濱文庫新収資料「錢玄同致周作人書簡」について： 錢玄同，周作人，中村不折の書をめぐる日中文化交流

中里見，敬
九州大学大学院言語文化研究院：教授 | 九州大学附属図書館研究開発室：室員

<https://doi.org/10.15017/1935831>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2017/2018, pp.8-17, 2018-07. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

補記

中里見敬

2019年3月22日

台東区立書道博物館の学芸員・鍋島稲子先生のご教示により、楊天石主編『錢玄同日記（整理本）』1934年12月26～28日で「法華玄黄」と翻字されている箇所は、正しくは「法華玄賛」であることがわかった。注3に記したように『錢玄同日記（影印本）』は判読不能なくらいに崩した書体で書かれているため、整理本の誤りはやむをえない。これにより、錢玄同が模写した「法華玄賛」は、『書道全集』第10巻に収録されているものであることも判明した。

あわせて、平凡社版『書道全集』を錢玄同が北平で見ることができた事情について、九州大学大学院博士課程の稲森雅子氏の論考に教えられた。

また、錢玄同の書簡に記されていた「名齋」について、中山大學（珠海）の陳潔先生よりご教示いただいた。

以上のご教示を踏まえた正誤表、ならびに本文改訂版を公開することとした。ご教示いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

正誤表

9 頁左 21 行

(誤) 名齋 (不詳, 錢玄同の書齋名か)

(正) 名齋 (錢玄同の書齋名^{補注})

補注

北京新文化運動紀念館所蔵の周作人致錢玄同書簡(1930年12月25日)に、「名齋足下」と記されていることを、中山大學(珠海)の陳潔先生よりご教示いただいた。この書簡は同館所蔵書信叢書に収録され、出版予定だという。

13 頁左 2, 4, 5, 11, 14, 24, 26, 32, 34 行

(誤) 「法華玄黄」(または「法华玄黄」)

(正) 「法華玄賛」(または「法华玄賛」)

13 頁左 19, 21, 25, 27 行

(誤) 「玄黄」(または「玄黄」)

(正) 「玄賛」(または「玄賛」)

13 頁左 5 行

(誤)

なお、「法華玄黄」が何を指すのか不詳であるが、『書道全集』第4巻の別刷りとして挟み込まれている「譬

諭經」(魏甘露元年, 中村不折蔵)(図6)を指すのかも
しれない¹⁷。そうだとすると、購入を希望したのは、『老
女人經零片 譬諭經殘1巻 地黄湯帖1巻』(孔固亭真蹟
法書刊行会, 1934)の可能性がある。

(正)

「法華玄賛」とは、『書道全集』第10巻(東京:平凡社, 1930)に凶版が収録されている「法華經玄賛卷第七」, 「法華經玄賛義決」, 「妙法蓮華經玄賛第四函」, 「法華經玄賛第八」を指す。「法華經玄賛卷第七」に対する中村不折の解説によると、「玄宗天寶十二載に寫したもので、(中略)草書、敦煌の出土である。(中略)書體は草草に近く渾熟洒脫の妙がある。後に掲ぐる玄讚第四, 第八, 玄讚義決と共に草法研究の好資料である」(釈文解説30頁)。

13 頁左 30 行

(誤)

その依頼に対する周作人の返事が、1935年1月25日の日記に記されている。

(正)

また、「妙法蓮華經玄賛第四函」の解説で中村不折は、「此經の書體は獨艸である。凡そ草書で兩字相連接せず、而して又波磔八分の筆意のないもの、之を獨艸と曰ふ。(中略)此の卷の書風を觀れば、筆端の變化神に入り、姿態雄渾、明の宣宗の草書の歌を想はしむる所の佳蹟である。(中略)此の卷は墨光漆の如く、紙墨相映發して人の眉目を撲つる概がある。自分が嘗て此の一部を影印して世に公にした事がある」(釈文解説31～32頁, 下線は引用者による)という。錢玄同はこの解説を読んで、中村不折が影印した「妙法蓮華經玄賛第四函」を文求堂を通して購入しようとしたようである。その依頼に対する周作人の返事が、1935年1月25日の日記に記されている。

13 頁左 34 行

(誤)

周作人からの来信で、「法華玄黄」は中村不折が印刷に付したものの一部だと知る。すでに絶版とのことで、残念である。

(正)

周作人からの来信で、「法華玄賛」の中村不折が印刷に付した部分は、すでに絶版とのことで、残念である。

16 頁注 17

(誤)

中村不折は「譬諭經」について、「此の經、書品典雅、筆勢雄渾である。(中略)鍾繇の隸書は此の如き面貌風采のものならむと想像される」という(『書道全集』第

4 卷（参考文献 24），积文解説 p. 7）.

（正）

磯部章編集『台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵 禹域墨書集成』巻中（文部科学省科学研究費特定領域 研究〈東アジア出版文化の研究〉総括班，東京：二玄社，2005）に，「法華経玄賛巻第七」【079】，「法華経玄賛義決」【099】，「妙法蓮華経玄賛第四函」【100】，「法華経玄賛第八」【101】が全紙，複製影印されている。台東区立書道博物館の学芸員・鍋島稲子氏よりご教示賜った。記して深謝したい。

ちなみに，銭玄同が見た『書道全集』は，同い年の甥にあたる銭稲孫が設立運営した泉寿東文書庫に所蔵のものであつか，または泉寿東文書庫をとおして平凡社から購入したものと思われる。稲森雅子「銭稲孫の私設日本語図書室「泉寿東文書庫」」（『中国文学論集』46，2017）参照。

以上の修正により，第3章第5節および注17を，以下のものに差し替える。また「法華玄賛」の図版を，銭玄同が見た平凡社版『書道全集』，および最新の『台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵禹域墨書集成』より掲載する。銭玄同が3日かけて臨模した章草の書体と，長文の「法華玄賛」の一部をご覧いただきたい。

3.5. 日本の書道関係の書籍

1934年12月、銭玄同は『書道全集』の「法華玄賛」を3日かけて模写している。そして、周作人をとおして東京の文求堂から「法華玄賛」を購入するよう依頼している¹⁷。

「法華玄賛」とは、『書道全集』第10巻（東京：平凡社、1930）に図版が収録されている「法華経玄賛巻第七」、「法華経玄賛義決」、「妙法蓮華経玄賛第四函」、「法華経玄賛第八」を指す。「法華経玄賛巻第七」に対する中村不折の解説によると、「玄宗天寶十二載に寫したもので、（中略）草書、敦煌の出土である。（中略）書體は章草に近く渾熟洒脱の妙がある。後に掲ぐる玄讚第四、第八、玄讚義決と共に草法研究の好資料である」（30頁）。

（1934年12月26日）因檢《書道全書》中之“法華玄賛”，遂抄之，抄了一点儿，此虽章草，而结体颇与《急就》不同，足见无泥汉章草之必要焉。『書道全集』の「法華玄賛」を調べるついでに、それを書写して、少し書いてみた。これは章草であるとはいえ、その字体は「急就章」とは違う。このことから漢代の章草に拘泥する必要のないことがよくわかる。）

（12月27日）灯下又抄“玄賛”，仍未毕，孔累，孔倦，十一时顷倒头即睡，睡至三时，方醒，始脱衣焉。〔夜，“玄賛”を書写するが、終わらない。ひどく疲れた。11時頃横になるとそのまま寝てしまい、3時に目が覚めて、ようやく服を脱ぐ。〕

（12月28日）上午抄完“法華玄賛”。午回家。午后四时顷访岂明，托其向文求堂购此“玄黄”。

〔午前，“法華玄賛”を書写し終わる。昼、家に帰る。午後4時頃、周作人を訪ね、文求堂でこの「玄賛」を購入するよう依頼する。〕（下1056-1057；9:5364）

また、「妙法蓮華経玄賛第四函」の解説で中村不折は、「此經の書體は獨艸である。凡そ草書で兩字相連接せず、而して又波磔八分の筆意のないもの、之を獨艸と曰ふ。（中略）此の巻の書風を觀れば、筆端の變化神に入り、姿態雄渾、明の宣宗の草書の歌を想はしむる所の佳蹟である。（中略）此の巻は墨光漆の如く、紙墨相映發して人の眉目を撲つ概がある。自分が嘗て此の一部を影印して世に公にした事がある」（31～32頁、下線は引用者による）という。銭玄同はこの解説を読んで、中村不折が影印した「妙法蓮華経玄賛第四函」を文求堂を通して購入しようとしたようである。その依頼に対する周作人の返事が、1935年1月25日の日記に記されている。

得启明信，知“法華玄賛”中村不折所印之一部分，其板已毀，頗为遺憾。又知堂云，当向旧书店中访之，但不知可得否也？〔周作人からの来信で、「法華玄賛」の中村不折が印刷に付した部分は、すでに絶版とのことで、残念である。周作人がいうには、古書店で捜せば、もしかしたら見つかるかもしれないとのこと。〕（下1066-1067；10:5425-5426）

銭玄同は平凡社版の『書道全集』以外にも、日本の書道関係の書籍に注意を払っていた。例えば、1934年9月18日の日記では中島竦が文求堂書店から出した『書契淵源』を称讃しており（下1038；9:5283）、1935年5月9日から11日にかけては中村義竹（字は立節）の『草露貫珠』に関する記述が見える（下1101-1102；10:5650-5657）。

注17

磯部彰編集『台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵 禹域墨書集成』巻中（文部科学省科学研究費特定領域研究〈東アジア出版文化の研究〉総括班、東京：二玄社、2005）に、「法華経玄賛巻第七」【079】、「法華経玄賛義決」【099】、「妙法蓮華経玄賛第四函」【100】、「法華経玄賛第八」【101】が全紙、複製影印されている。台東区立書道博物館の学芸員・鍋島稲子氏よりご教示賜った。記して深謝したい。

ちなみに、銭玄同が見た『書道全集』は、同い年の甥にあたる銭稲孫が設立運営した泉寿東文書庫に所蔵のものであったか、または泉寿東文書庫をとおして平凡社から購入したものと思われる。稲森雅子「銭稲孫の私設日本語図書室「泉寿東文書庫」」（『中国文学論集』46、2017）参照。

妙法蓮華經玄贊第四函 大正國語訳の再校
一、云々云々... (Main text of the sutra commentary, page 152)

一、云々云々... (Continuation of the sutra commentary, page 152)

一、云々云々... (Continuation of the sutra commentary, page 152)

一、云々云々... (Continuation of the sutra commentary, page 152)

一、云々云々... (Continuation of the sutra commentary, page 152)

一、云々云々... (Continuation of the sutra commentary, page 152)

一、云々云々... (Continuation of the sutra commentary, page 152)

図d 「妙法蓮華經玄贊第四函」(部分)
〔『台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵禹域墨書集成』巻中, 152頁所収)〕

然此經云云因之... 亦大矣中唱如... 白仙者亦友... 係也夫亦如... 經法仙其生... 亦一未中... 信一取... 仙生者... 新仙生... 仙獨... 仙生... 日... 教... 亦... 以...

(卷尾·部分, 原寸)

図e 「妙法蓮華經玄贊第四函」(卷尾、部分)
 (『台東区立書道博物館所蔵 中村不折旧蔵禹域墨書集成』卷中, 161 頁所収)